

かしわ



No. 15



平成28年2月3日 暮れの景色。

日本語力を育てる

校長 北村耕一

私は昨年度まで中学校に勤務していました。教科の授業は教えていませんでしたが、勤務校の先生方の授業を数多く見させていただく機会に恵まれました。また、中学校国語研究会に所属させていただき、研究授業も見られる機会にも恵まれました。

私自身が中学校の国語の授業を教えていた最後は、今から7年前までです。その頃、私の目指していたのは、「日本社会で生きていくうえで必要な日本語力の育成」でした。他の国語科の教師から見れば、堅苦しく、夢のない目標に見えたと思います。

何故このような目標を自分の心の中に定めたのか？そのきっかけになったのは、教師になり2校目に勤務した中学校の教え子の言葉です。現在42歳になる教え子が、20歳代後半の時に学年同窓会の幹事を務めてくれました。その同窓会を開催した時に話してくれた言葉。その言葉に私は驚き、同時に反省したのです。それは、「先生(=私)、往復はがきの返信の宛名に『様』を書いてこない人が多すぎる」という言葉です。

教え子に指摘されたことは教えていませんでした。そうした事柄について、学校や親に教わるものではなく、社会人として日本社会で生活していくうちに、自ら「調べて」学ぶものだという「思い込み」があったのです。これは、私自身の体験がそう思い込ませたものだと反省しました。

その出来事以降、しばらくの間は国語の授業から遠ざかりましたが、11年前に教壇に立った時には、必ず教えることにしました。



この「失敗」が、「日本語力を育てる」ことにどう関連しているのかと思う方もいると思います。私は、「日本語力」とは「日本語を使用する能力」だと思います。従って、学校教育で学んだ日本語による知識を活用して、日本社会で「生き抜く力」の土台となるものだと思います。言葉使い(尊敬語や謙譲語)、手紙の書き方、表書きの書き方、発表の仕方、プレゼンテーション等も含まれてくると思います。

要は社会人として自立して、日本社会・グローバル社会において、他者とコミュニケーションをとり、生

きていくために必要な「力」ということとなります。

本校においても、今年度の学校委託研究のテーマとして「一人ひとりの実態に配慮したコミュニケーション手段による、日本語力を育てる取り組み」を掲げ、一年間、授業・学校行事等を通して取り組んできました。その取り組みについて、幼稚部の「読み聞かせ」と小学部・高等部の国語の授業における「日本語力を育てる実践」を、担当者に書いてもらいましたので、紹介いたします。

幼稚部 読み聞かせの活動

幼稚部 教諭 鈴木由枝

「日本語力を育てる」実践の一つとして、幼稚部では、子ども達が絵本に親しむ機会が増えるように「読み聞かせ」を行っています。各教室には、今月の本として、季節や行事に関係する絵本を置き、担任が読み聞かせたり、子どもが気に入った本を見つけて、借りて帰ったりできるようにしています。

生徒会の取り組みとして、中高等部の図書委員が、毎回工夫を凝らした読み聞かせを行っています。カエルが出てくるお話では、テーブルいっぱいのカエルを折ってプレゼントしてくれたり、お化けのお話では、教室のあちこちからかわいいお化けが登場したりして楽しませてくれました。

神奈川県聴覚障害者協会のご協力をいただき、手話による読み聞かせも行っています。場面に応じて表情豊かに表現されるお話の世界に、手話の読み取りがよくわからない子ども達も、自然と引き込まれていきます。

校内行事の時には、お母さん達による読み聞かせを行っていただいています。先日のお楽しみ会では、見上げるほどの大きいサンタとかわいらしい小さいサンタを準備していただいております。教室いっぱいに大きな歓声が上がりました。

日本語力を育てるために読み聞かせを実践する効果として、語彙が増えたり、言い回しを覚えたりするようになる事はよく言われていることです。でもその根っこには、絵本を通して日常生活では経験できない世界を視覚的に体験し、読み手と聞き手が同じ世界を共有し、ワク

ワクワクしながら一緒にページをめくる楽しさや、もっと聞きたい、もっと見たいと駆り立てられるような気持ちを育てることではないでしょうか。難しい事は抜きにして、子ども達にとって、お気に入りの絵本が増えていくような読み聞かせになればと思います。それがやがて、ことばの世界を広げ日本語力を育てることに繋がるのではないのでしょうか。

小学部 国語の授業の取り組み

小学部 教諭 小佐野玲子

本校の研究テーマとして「日本語力を育てる取り組み」があります。その成果を表せるように小学部では 11 名の児童に指導を行っています。

まず、小学部全体で取り組んでいることに「読書指導」があげられます。全ての小学部の教室に手作りの書棚が置かれ、学級文庫が設けられています。その棚には各学年の国語の教科書の中で紹介されている本を置いたり、児童の自由に選んだ本を定期的に入れ替えたりしながら、いつでも手に取れるようにしています。

給食の前に 15 分程度「読書の時間」を設け、図書係からの「本読みきょうそう」という読書カードによる呼びかけを通して、段階的そして継続的に読書が習慣になるようにしてきました。また、朝の会や行事の説明の際に「エプロンシアター」を行うことがあり、その結果として、行事に取り組む際のモチベーションが上がるなど効果が表れています。さらに、教員やろう者によって「絵本の読み聞かせ」を行い、授業や行事のめあてに合わせながら手話や口話を交えて取り組んでいます。こうして様々な言葉や事象に興味や関心を持つ児童が増えてきています。

そして、授業では、単元ごとに子どもの実態に即した最新の辞書を活用することで語彙を広げ、言葉の動作化や音読や自ら作成した視覚教材を駆使した内容などに取り組んでいます。



このように、子どもたち一人ひとりの実態に応じたコミュニケーション手段を活用しながら、豊かな言葉の獲得や読書指導を目指して取り組んでいます。

規模は依然として小さな学部ですが、そこは「少数精鋭」。きめ細やかな指導体制のもと、発達段階を考慮した教育課程を編成し指導にあたることで、子どもたち一人ひとりに国語の学

習に向かうのびやかで真摯な姿を目指して、新たな国語指導を推進していきたいと思えます。

高等部 国語の授業の取り組み

高等部 総括教諭 渡辺豊

高等部の授業に「国語表現」という科目があります。読んで字の如く、様々な学習活動を通して、自分の表現能力を伸ばす科目です。現在の高等部3年生は、2年生の時から続けてこの科目を履修しています。当初は、あまり乗り気ではなかった生徒も、作品を創り上げるごとに徐々に自信をつけ、興味も増したように感じられました。2年生の前期では「俳句」や「川柳」に取り組み、お互いの作品を発表し合いました。

更に「高校生の川柳コンクール」等にも応募しました。残念ながら選には漏れましたが、それでも私の目には生徒の表現力が着実に伸びていると映りました。後期では「短歌」の創作を行いました。前期の学習で既に文字遊び・言葉遊びに慣れていた生徒は、違和感なく取り組むことができました。この間、簡単な助言はしたものの、作品を大きく直させるような指導はせず、只々生徒の創作意欲を高めることをねらいとしました。

その甲斐あって、3年生になってからは、「課題小説」や「記事への意見文」に取り組んでも、自主的にテーマを探し見つけ進めることができました。この辺りから、生徒の気持ちの中に「もっと自分の作品を面白くしたい」「もっと上手に書きたい」という欲求が強まり、こだわりを見せるようになりました。去年の秋には、生徒各々の「短編作品集」（課題小説・自由小説を含む）を完成し、かしわ祭で展示することができました。まだ拙い表現も多く見受けられますが、何より作品からは生徒のやる気が伝わってきます。誤字脱字、表現の誤り等、指導すべき課題は沢山ありますが、この「国語表現」という科目で一番私が大切にしたいことは、「表現することの楽しさ」です。毎回、作品の完成後、楽しそうに自分の新しいペンネームを考えている生徒の表情を見て、少しはその目標に近づけたかなと感じています。

※2月の行事予定につきましては、各学部・学級の便りで確認してください。

横須賀市立ろう学校
〒238-0023 横須賀市森崎5-13-1
TEL 046-834-1172 FAX 046-834-0096
学校HPも更新しています。ご覧ください。